

11. お笑いとかん

2025/5/2 白子隆志

私は今年で(主に)外科医として医者生活 40 年になりました。その中で多くのがん患者さんと出会い、治療を行ってきました。40 年前には癌の治療といっても「手術療法」が主流で抗がん剤治療(免疫療法)はやってはいましたが(正直なところ)効かないことが多く、効いても逆に患者さんの生活(QOL)は悪くなり、結果的に何もしないより治療して苦しんだほうが命が短くなることもよくありました。10~20 年が経ち、がんと遺伝子の関係が研究されるようになり、アメリカの研究室で「がん免疫(自分の体の中のある細胞ががんを認識し攻撃する)」を研究しに 1996 年にニューヨーク州バッファロー(ナイアガラの滝の近く)の Roswell Park Cancer Institute に行きました。肺がんの患者さんから摘出したがん細胞をマウスに移植して培養し、患者さんの血液から抽出した免疫細胞の効果を測定していたわけですが、結局のところ短期間の研究では効果があるだろうというところまでで終わりました。30 年が経つと癌細胞の表面マーカー(増殖機構)の研究が進み、そのマーカーと結合する物質を作り出すことによって、特異的に癌を縮小(中には消失)させることが可能となってきました。実際の臨床でも、アバスチン、オプジーボなどの様々な分子標的薬の出現と、様々な抗癌剤の組み合わせによって多くのがん患者が以前なら半年といった余命が 5~10 年と伸びるようになってきました。手術療法も「腹腔鏡手術」が一般的になり、さらにはロボット支援手術も広がりつつあります。今や癌は治らない病気ではなくなり、早く見つければ治すことができる病気に代わってきています。

ところで、皆さんも経験したかもしれませんが、がん患者さんでも「性格が明るい」「楽観的」な患者さんと「性格が神経質」「悲観的」な患者さんとは、前者の患者さんのほうが長生きされているような気がしていました。「病は気から」ということが、よくわからないけど本当のことだと僕も信じていました。

こういった伝説を証明するために、数年前に近畿大学×吉本興業株式会社ががん経験者の生活の質向上等に「笑い」の効果があることを医学的に検証する研究が実施されました。方法はがん経験者 50 人を対象に、自宅などでお笑いの DVD を毎日 15 分以上、4 週間鑑賞し、採血による酸化ストレス測定とアンケートによる心理検査を実施しました。その結果、毎日のお笑い鑑賞に、がん経験者の生活の質と抗酸化能力、不安、うつを改善する効果がある可能性が示唆され、令和 5 年(2023 年)8 月 1 日(火)に国際的な医学雑誌”Cureus(キュリアス)”にオンライン掲載されました。

「笑い」とともに「笑顔」の効果は、通常のコミュニケーションでもあると思います。とくに医療安全の面では「言しやすい職場の雰囲気づくり」がキーポイントとなりますので、今年度もよろしくお願いします。



たまには写真（松川町の春）